

国立民族学博物館の収蔵品 ③2

谷汲踊りのシナイ



日本展示場のシナイと筆者

日本展示場に私が生まれ育った故郷からやってきた、私にとって大変なじみ深い展示品がある。それは四メートルほどの巨大な竹製の扇の飾りである。この飾りは、岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲（旧谷汲村）の谷汲踊りを踊る際に用いられる。鳳凰の羽をイメージし、カラフルな和紙で装飾されたこの飾りはシナイと呼ばれる。谷汲踊りは、豊年祈願祭をはじめとする様々な行事の際に踊られる。踊りの舞い手は前方に太鼓を抱えて打ち鳴らし、背中にこのシナイを背負う。そして踊りの要所で、シナイをダイナミックに旋回させる。その姿は大変雄壮である。

谷汲は、岐阜県の西南部に位置し、自然環境や動植物との関わり合
いの中で、人々が豊かな地域文化を育んできた。谷汲は、西国三三所

霊場巡礼のゴールである谷汲山華嚴寺をはじめ、舍利仏や、多くの重要文化財を持つ両界山横蔵寺で知られる。また、付近の揖斐川流域各地には、同じように竹と和紙を使用したシナイを背負って舞う鎌倉踊りが見受けられる。

谷汲踊りの起源には諸説あるが、源氏が平家を滅ぼし、鎌倉へ戻った際に、戦勝を祝って踊った踊りがルーツであるという話がよく知られている。その後、雨乞いを祈願する踊り、さらに五穀豊穡を祈るための踊り、と踊りの意味合いは変化していった。しばらく衰退していたが、一九五〇年代に保存会が設立され復興させられた。

一九九〇年代に入ると谷汲では、地域の伝統芸能を学ぶことを目的に、谷汲踊りを学校教育の現場に取り入れた。中学校に入ったばかりの私たちは、保存会のメンバーから、太鼓の叩き方や踊りの詳細を学びとった。そして秋に行われる学校の運動会でその成果を披露することになった。運動会が近づくと、われわれは毎晩、中学校の体育館に通い保存会の古老たちに耳を傾け練習をした。太鼓のリズムパターンや基本的な足運びは、決して複雑ではない。しかし、一つ問題があった。背中の巨大なシナイをいざ背負うと、重すぎて全く身動きがとれなかったのである。太鼓、シナイあわせて三〇kgになることもある。それを中学生に背負わせ踊らせるというのは、いささか無理な話である。運動会の直前に保存会メンバーが、大慌てで通常の半分のサイズのシナイをこしらえることになった。このミニサイズのシナイでわれわれ中学生は谷汲踊りをなんとか無事に踊ることができた。

日本展示場のシナイの前を通るたびに、その重さを思い出し、背中が痛むのである。

（川瀬 慈）